

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
評価用研究成果報告書（中間評価）

研究テーマ情報

プログラム名	学術知共創プログラム
課題	課題B：分断社会の超克
研究テーマ名	身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現
研究代表者所属研究 機関・部局・職	国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 教授
研究代表者名	床呂郁哉

研究費（直接経費）（千円）

令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)	令和8年度 (2026年度)	令和9年度 (2027年度)	令和10年度 (2028年度)	合計
10,000	14,500	14,700	14,500	14,500	14,700	82,900

※令和8（2026）年度以降は内約額。

研究の概要（0.5頁以内）

本報告書「1. 研究の目的・意義」、「2. 研究内容・方法」、「3. 研究の進捗状況・成果及び波及効果」に記述した内容について、その概要を簡潔に0.5頁以内で記述すること。

近年、グローバル化の進展や社会の大規模化等に伴い、移民・難民や外国出身者への差別があるとか、ジェンダーや障害の有無等の指標をめぐる分断等が顕著になりつつある。本研究では、こうした状況に鑑み、従来の先行研究では必ずしも十分に検討されてこなかった多様な身体的実践の次元に焦点を当てながら人文社会系の諸分野を中心に学際的な研究を実施することを目的としている。

本研究は、こうした分断やその背後にあるバイアスを積極的に問題化して乗り越えることで、社会的分断の克服に向けて身体性に焦点を当てたアプローチから取り組む学際研究の試みである。このために、本研究では、文化人類学・地域研究、心理学・認知科学、哲学・倫理学・障害学等を含む諸分野から構成される計3つのクラスターの連携で共同研究を展開しつつある。これに加えて、社会的分断や差別を超克していく視座を構築するためにダンス、演劇、ボディ・ワーク等の身体的実践を含んだワークショップ等とその手法構築、シンポジウムや講演などを含むアウトリーチ活動と社会への成果発信等にも積極的に取り組んでいる。こうした諸活動は大学所属の狭義の研究者のみならず、社会的分断の問題に取り組むNGO（NPO）関係者やアーティスト・映像クリエイター、そして障害者をはじめとするマイノリティ当事者などを含む多様なステイクホルダーとの協働によって、分断の超克と多様性の実現への提言を与えることのできる視座を＜共創＞することを目指し、着実に研究活動を実施中である。

1. 研究の目的・意義（1 頁以内）

応募内容提案書に記載した研究の目的・意義について、課題の内容に照らした問題意識、その課題との関連性並びに人文学・社会科学に固有の本質的・根源的な問いを追究する意義を明確にした上で、具体的かつ明確に 1 頁以内で記述すること。

近年、地域や国境を越える人やモノ、文化等の移動や交流等が加速する一方で、そうした越境に伴う摩擦や衝突が顕著になりつつある。移民の増加等を背景とする外国人差別はその典型的な反応の一つである。他にも社会の複雑化に伴いジェンダー、エスニシティ、社会階層、障害の有無などの指標を理由とする差別や社会的分断も以前にも増して顕在化している。また近年のコロナ・パンデミックは、欧米など各地で、アジア系住人に対するヘイトクライムを増加させるなど新たな差別や偏見の背景にもなった。

こうした分断や差別に対する超克を目指す従来の先行研究においては、どちらかと言えば各国の政治・経済的構造や制度・政策等のマクロな領域を対象とする研究が進められてきた。一方、個々人がいかなる場面で分断や差別を経験し、またそれを助長する行動を取るのか、回避したりするのか等の、より具体的な日常生活に直結したミクロな視点からの検討も必要である。その際に、多様でありながらも全ての個人が共通にもつ「身体」が果たす役割（身体性）の問題は重要であるものの、軽視されがちな主題であった。しかし実際には、ローカルな身体経験を含む身体性の次元が、差別を筆頭とする社会的分断を考察する上でも極めて重要であることが、近年の先駆的研究の中で明らかになってきている。

例えば認知科学の分野においては、人間の認知プロセスが単なる情報処理ではなく、環境と身体との相互作用の産物としてあるという「身体性認知」の立場が新たに注目されている。また、心理学や哲学の分野でも、潜在的バイアス研究や「人種の現象学」と呼ばれる研究の展開のなかで、肌の色をはじめとする相手の身体的属性に関する言語化以前の知覚や無意識的な身体的応答などが、人種差別において看過できない役割を果たしていることが指摘されつつある。

同様に、LGBTQ など性的マイノリティや障害者への差別、さらにはいわゆるルッキズムをめぐる問題等でも、他者の顔身体の見え姿（appearance）をはじめとする身体性の次元が極めて重要である点は、改めて詳しく述べるまでもないだろう。またコロナ・パンデミック以降は、マスク着用の是非をはじめとして、まさに身体性をめぐる意見や価値観の相違が世界各地で新たな社会的分断の一因となっている。

本研究は、明示的に自覚され言語化されたレベルはもちろん、必ずしも言語化されない暗黙知的な認知プロセスや身体的応答までを含む世界各地の多様な身体的実践の次元に焦点を当てながら、差別を含む社会的分断の超克と、真の多様性の実現に向けた学問的かつ実践的な視座を提供することを主な目的としている。

こうした目的のため、内外の人類学、地域研究、哲学、心理学、障害学、政治学、アート・芸能研究など人文社会系の諸分野はもとより、認知科学、運動科学、神経科学など自然科学的手法を含む研究分野に従事する研究者、さらには社会的分断の問題に取り組む NGO（NPO）やアーティストなどを含む多様なステイクホルダーとの協働によって、分断の超克と多様性の実現への提言を与えることのできる視座を＜共創＞することを目指す。本研究では、アジアとアフリカを横断する研究体制の構築を通じ、世界的にも先駆的な学際的共同研究を推進するのみならず、欧米的枠組みを脱却した「Beyond Western」の視点に基づく人間科学の構築が、分断の超克及び多様性の実現に寄与することが期待される。

2. 研究内容・方法（1頁以内）

応募内容提案書に記載した研究計画について、本プログラムの趣旨及び課題の内容を念頭に置いて、何を、どのような方法を用いて、本報告書提出までにどこまで明らかにしようとしたか、研究期間内にどこまで明らかにしようとしているのか、具体的かつ明確に1頁以内で記述すること。なお、研究の進捗に応じ応募内容提案書から変更した部分があれば理由とともに明記すること。

身体性の次元に焦点を当てた社会的分断の超克に関する本格的な分野横断的研究は、狭義の生物機械論的な視点だけではなく、本研究のように、世界各地の社会・文化的な文脈に即した豊かで多様な身体性に注目する人類学や地域研究、哲学、心理学、障害学など人文社会系の諸学の主導による分野越境的なアプローチが必要不可欠である。そして現代社会においては、グローバル化に伴って世界各地の人間や文化が越境して場合によっては混淆したり新たな文化を創発したり、あるいは逆にその反動として新たな境界を形成するといった複雑でダイナミックな状況—いわゆるトランスカルチャー（越境文化）的状況—がますます顕在化しつつあり、身体性を研究する上でも、こうしたより動態的な枠組みの構築が必要である。こうした点に鑑み、本研究では、近代西欧に端を発する身体軽視のバイアスや普遍主義的な身体観を革新するために、各地の多様な身体性にも目配りした「身体に関する多様で変容的なパラダイム（diverse and transformative paradigm of body）」の構築を提唱していく。すなわち身体を研究するに当たって、それを普遍主義的かつ静態的（固定的）な旧来の身体観のバイアスから解放して、身体を「多様性（diversity）」と「変容（transformation）」の相から総合的に検討していくことを試みるものとして活動を実施している。より具体的には、本研究では、多様な分野の研究者とステイクホルダー（身体的障害の当事者を含む）による学際的共同研究を通じて、例えば、人種やエスニシティ、ジェンダー、年齢、障害の有無（及び程度）、文化社会的状況など、個人が直面する多彩で具体的な状況に応じた多様な身体的経験に即した身体が多様性に焦点を当てた共同研究を各クラスター、さらに参画者も協力するカタチで実施しつつある。

こうした作業を通じて本研究では、多様な他者の有する多様で豊かな身体経験を理解し、共有し、身体的実践を通じて「他者と同調／共振する」「他者に成る／変身する」可能性までを含めて社会的分断を具体的な身体性の次元で超克していくための視座を構築するべく検討してきた。例えば各年度に開催してきた身体性に関するシンポジウム（2024年11月、2025年2月）等においては視覚障害者や聾者などをはじめとするマイノリティの身体経験を、「どれだけマジョリティの身体に近づける（同化させる）のか」という視点ではなく、むしろ「身体経験は彼ら／彼女ら自身の固有で豊かな経験に裏打ちされた文化（例えば「ろう文化」等）や生活世界を有している」のではないか、という問いから出発した問題提起と知見の共有と検討を実施しつつある。

更に本研究では、そうしたマイノリティの身体経験を、マジョリティの側も一時的ないし疑似的に体験（参与観察）しうるような、各種の身体的実践や経験を通じたワークショップ等の手法を構築するための実践的・実験的なワークショップを既に複数回、実施しつつある（詳細は次頁「研究の進捗状況・成果及び波及効果」のうち特にイベントに関する箇所を参照）。こうした試みは疑似的（一時的）にマジョリティの側もマイノリティの身体的経験を共有することで、普段は暗黙の裡に分断されている「マジョリティ／マイノリティ」の文化的・身体的境界を越える、いわば、文化越境的な身体実践（Transcultural Bodily Practice：TBP）に関する研究／アウトリーチ活動であると位置付けることができる。これらは単に基礎研究の次元にとどまるのではなく例えばNPO関係者等の実務家やアーティストら多様なステイクホルダーとも協働して、文化越境的な身体実践（TBP）を含むワークショップや各種の成果公開や成果還元等の活動を通じて、社会的分断を乗り越え架橋するための身体的方策を想像＝創造するため各種の方策を実践しつつある。

3. 研究の進捗状況・成果及び波及効果（6頁以内）

本報告書提出までの研究の進捗状況・成果及び波及効果を、以下の点を含めながら、具体的かつ明確に6頁以内で記述すること。

- ・本事業の趣旨及び当初の研究目的に沿って、着実に研究が進展しているか。
- ・具体的な研究成果及びそれらのどのような点が先導的であるか。
- ・未来社会が直面するであろう諸問題に係るどのような応答を研究成果として提示できているか。
- ・人文学・社会科学と自然科学の双方に学術的視野の広がりをもつ人材の育成にどのように寄与しているか。
- ・研究成果をどのように公開・普及させているか。
- ・研究成果及びその普及によって、学術や社会の発展へどのように寄与しているか。
- ・研究成果の発表・発信状況。（主な学術論文、学会発表、著書、産業財産権、招待講演、ホームページ、主催シンポジウム、一般向けのアウトリーチ活動等。ただし本報告書提出までに掲載等が確定しているものに限る。なおe-Radに入力した分はここに記載する必要はない。）

【本事業の趣旨及び当初の研究目的に沿って、着実に研究が進展しているか。】

2023年度から25年度はじめの現在にかけて、本共同研究では以下のように当初の目的に沿って着実に研究を進展させてきた。まず初年度にあたる23年度は、共同研究に参加する文化人類学・地域研究、心理学、哲学、障害学、認知科学、運動科学、アート研究などの多分野の研究者間で、本研究の趣旨と目的、基本的な問題意識の共有、研究体制の立ち上げ、そして共通の研究枠組みの構築と共有に向けた研究成果の共有などの作業を重点的に実施した。

より具体的には、本課題メンバーが参加するキックオフシンポジウムを東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）で開催し、問題意識の共有を図った。また23年度内にAA研内に本研究事務局を設置し、事務補佐員1名、及び本研究に関わる若手研究者育成を兼ねて研究員1名の雇用を開始するとともに、本研究のホームページとMLなどを立ち上げて共同研究の実施のための具体的なプラットフォームの構築に着手した。

次に二年目にあたる2024年度以降は、初年度での研究体制の立ち上げとスタートアップと準備作業を踏まえて、更に本格的な共同研究を展開しつつある。このうちクラスターAの人類学・地域研究系のメンバーは、必要に応じて他分野の研究者とも密接に連携しながら、各地における身体的な実践の多様性の実態と、それが社会的分断とその超克の問題に、いかに絡み合っているのかを具体的・実証的に調査研究するため、東南アジアなど海外でのフィールド調査を含む調査研究を始動した。また心理学・運動科学系の研究者からなるクラスターB、ならびに哲学・倫理学・障害学等を専門とするメンバーからなるクラスターCは、それぞれ身体が周囲の他者や人工物等を含む認知的・生態的・社会文化的環境のなかでいかに活動しているのかを解き明かすための心理学的実験や観測、そして哲学・倫理的な見地からの理論的考察に加えて、後で詳述する「哲学対話」等の実践的な活動等も実施した。さらには、こうした各クラスターごとの研究活動に留まらず、各年度に実施したシンポジウムや、研究成果共有のための年次（全体）集会等の実施を通じて、分野を越えた知見の共有と分析枠組みの検討を行うこともできた。

また成果発信・公開等をはじめとする広義のアウトリーチ的活動も、この二年間にわたって積極的に取り組んできた。具体的には、単なる旧来のアウトリーチ講演会だけでなく、参加者がより主体的な立場から参加していく「哲学対話」、自己肯定感を高めると同時に他者理解を促進するボディ・ワーク、多様な社会的文脈における無意識的認知を顕在化する演劇的パフォーマンス手法等も積極的に取り入れた文化越境的な身体実践（TBP）ワークショップ等を実施することを通じて、いわゆる「異文化」に属するとされる人種的他者や障害者など「マイノリテ

イ」の身体的経験を疑似的に体験する方法論を、研究者とステイクホルダーの協働によって検討していくなど、当初の研究目的に沿って着実かつ積極的に共同研究を展開しつつある。

【具体的な研究成果及びそれらのどのような点が先導的であるか。】

まずクラスターAでは、2023年から24年度にかけて文化人類学や地域研究等の視点から、社会的分断とその身体性を通じた超克の可能性や、身体的実践・表現等の多様性に関して現地での実証的なフィールドワーク等を含む調査研究を実施した。具体的には東南アジア島嶼部(主にインドネシア、フィリピン、マレーシア)とアフリカなどにおいて、ムスリムと非ムスリム、障害者とマジョリティの関係、ジェンダー等の項目を含むフィールドワーク等を通じたデータ収集・分析(床呂、吉田、村津)、および関連するテーマに関するフィールド実験的手法の開発(高橋)を実施することができた。この過程で、これまで多民族・多宗教社会における民族的・宗教的多様性に起因する摩擦や分断が指摘されることもあった現地社会において、例えばインドネシアではヒンドゥー教に基づくバリ芸能にムスリムのジャワ人が参加し実践することなど、芸能という身体実践を通じて結果的に社会的分断が緩和・中和されているような事例や、アニメキャラ等のコスプレやいわゆる「カワイイ・ファッション」をはじめとする日本発のポピュラー文化に沿った実践を通じて、結果的に多民族がファンダムの場で民族的・宗教的境界等を超えて共存することを可能としているような事例、またムスリムがマジョリティを占めるインドネシアやマレーシアで所謂クロス・ドレス(異性装)を含む身体表現が行われている事例など、これまでの先行研究等では必ずしも十分に検討されてこなかった事象を対象としたデータ等を収集し、萌芽的な研究知見を得ることができた。

またクラスターAでは、こうした成果を単に通常の論文・学会発表等の媒体による成果発表だけではなく、(それらに加えて)映像制作や展示、演劇といった手法を使いながら、調査・探究・成果発表する演劇人類学／映像(マルチモーダル)人類学的手法、文化越境的な身体実践(TBP)を含むワークショップの手法構築にも着手し、後述する一般公開のワークショップ等のイベント等でも積極的に実践している点を本課題の先導的な点として挙げることができる。

次にクラスターBでは、主に心理学・認知科学・運動科学系の研究を通じて、社会的分断の背景のなかでも従来の先行研究では必ずしも十分に検討されてこなかったような、身体化され無意識化された認知バイアスの存在に焦点を当てた研究とデータ収集を実施し、主に他者認知における知覚モダリティの影響を実験的に検討し(非言語的)身体的情報の重要性を明らかにするなどの成果を得た。さらに山口は社会的分断にまつわる身体的基盤の調査のひとつとして、マスク着用など身体をめぐるポスト・コロナ状況下で浮上しつつある分断等に関しても発達心理学等の知見や方法論も駆使しながら、検討を行った。これらの成果は、社会的分断の背景となりうる無意識的な知覚プロセスならびに認知バイアスの内在的メカニズム理解に寄与し、本事業の根幹にある「身体性の次元からの分断超克」という目的に貢献する先導的な成果として位置付けることができる。また分担者の工藤は、スポーツ競技や演劇などの身体的パフォーマンスにおける対人間の相互作用や、スポーツを通じた社会的分断の融和プロセスなど、社会的文脈に即した具体的事例分析を進めた。これらは身体運動科学と人文社会諸分野の融合的研究の先導的实践といえる。また分担者の渡邊はロボットをはじめとする準一ヒト的な機能を潜在的に有する人工物と人間の分断の架橋という視点から、女性を模したアンドロイド型ロボットである Sophia を題材とした研究に着手し、その制作会社である Hanson Robotics の創始者かつ代表取締役である Dr. David Hanson と共同研究を進め、Sophia を含む女性4名での会話

形式でのインタビュー/撮影による実験的映像の作成を通じた実験的研究も実施している。本活動は、「ヒト・ロボット」「ジェンダー」「身体の獲得」「国籍」など、社会的分断とその超克にむけた重要な切り口に対し、映画の作成といった実践を通じて理解・分析を進める基盤となる先導的な試みであると言える。

最後にクラスターCでは、研究開始から現在まで大きく分けてふたつの方向で研究を展開しつつある。まず一つ目は、社会的分断と身体性に関する哲学・倫理的な視座からの理論的な検討作業、二つ目は「哲学対話」をはじめとするワークショップ等のアウトリーチ的活動とその方法論の検討という作業である。

まず哲学的・倫理的な理論的検討作業としては、主に人種差別や民族差別をめぐる分断とそこにおける身体性の問題に焦点をあて、その超克のための方法論の検討と実践について研究を進めた。例えば小手川は、人種の現象学を日本の文脈で展開するために、英語圏の「白人性」研究との比較のもと、批判的な観点から「日本人性」について現象学的に分析することを試みた（小手川 2024「日本で人種的マジョリティであること——「日本人性」の批判的現象学の試み」）。日本国内の人種的マジョリティと人種的マイノリティの分断がいかなる見方から生じうるのかを明らかにし、その分断を超克するためにいかなる視座が必要かについて研究を進められた。また分担者の田中は障害者自身による芸術実践（演劇・アート）に関して調査研究を実施し、障害をめぐる社会的分断に関して検討した。

二つ目のアウトリーチ的活動としては、例えば 2024 年 7 月には、ルワンダで長く義足をつくりながら障害者支援を続けてきたルダシングワ真美、ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル夫妻を東京外国語大学に招聘し「ルワンダの戦前と戦後一国の変化を共に見る」というワークショップを開催し、内戦という苛烈な暴力を伴う社会的分断を経ながらも、それを共生へと転換していくにあたっての方策に関して学際的な観点から検討を実施した。更にクラスターCでは、参加者相互がフラットな立場から参加し対話を通じて、様々な文化・地域・ジェンダー・年齢・障害の間の相互理解を刷新していく「哲学対話」の試みを各地で実践することができた。また本共同研究の年次（全体）集会やシンポジウムにはクラスターCのメンバーも積極的に参加し、登壇者等のかたちで研究知見の共有と寄与を実施した。

このように総じて本研究では、社会的分断と身体性の関係について各クラスターに応じて人類学的フィールド研究、哲学、心理学等を含む理論的検討などを深めると同時に、演劇的／映像人類学的手法やボディ・ワーク等の実験的・先導的な手法を含む身体実践中心の参加型イベント等を通じて、社会的分断を超克していくための先導的な視座の＜共創＞と発信を実施した。

【未来社会が直面するであろう諸問題に係るどのような応答を研究成果として提示できているか。】

今後 30 年から 50 年先に渡って世界的にも、また我が国でも、グローバルな世界経済の拡大に伴い、人や文化の国境を越えた交流はますます加速していくことが予想される。日本においても、少子高齢化への対応を背景に、移民や留学生、あるいはインバウンドの観光客などさまざまな形で外国人との交流の増加が予想される。この過程では、いわゆる欧米圏出身者だけに留まらず、イスラーム圏をはじめ、日本とは文化的な背景が大きく異なる地域の出身者を含む多様な人々との交流がさらに拡大することが予想され、それに伴って起こりうる潜在的な摩擦や分断を、いかにして乗り越えて共生していくのが、これまで以上に喫緊の課題となることが明白である。こうした問題に関するマクロな政策論的、ないし制度的な次元からの研究の進

展に比べて、よりミクロな身体性の次元は必ずしも十分に研究されてきたとは言えない。

同様にジェンダーや障害などの問題をめぐっても、いわゆる LGBTQ や障害者などの多様なマイノリティへの社会的包摂や理解が、今後も現在にも増して重要な課題となることは必至である。このような問題意識を踏まえ、本課題では学術的論文や学会発表等を通じて研究者コミュニティに成果発信することに加えて、例えば講演会や映画（映像作品）上映を含むアウトリーチイベントや、先述のような演劇的手法やボディ・ワーク等を含む身体的実践を用いた参加型の実践ワークショップ等、一般市民にも開かれたイベントを開催することでより広い研究成果の社会還元にも貢献している。

【人文学・社会科学と自然科学の双方に学術的視野の広がりや有する人材の育成にどのように寄与しているか。】

まず 2023 年度には若手研究者育成を兼ねて「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」という研究目的に寄与する研究員の公募を東京外国語大学 AA 研において実施し、同年度内に、応募者の中から大村優介氏（当時、東京大学大学院博士課程）を審査の結果、採用し雇用を開始した。大村氏はラオスの首都ビエンチャンを調査地に定め、2019 年から現在に至るまで現地における男性同性愛的欲望を持つ人々のネットワークや社交、舞踊を含む身体的パフォーマンスに関する文化人類学的な研究を行っているが、同氏は本共同研究において、自身による個別の研究に加えて、クラスター A の文化人類学はもちろんのこと、クラスター B や C に属する心理学・認知科学・運動科学・哲学等の幅広い異分野の研究者の参加による各種のシンポジウムや研究会等のイベントに参加して、より広い観点から研究の視座を拡大しつつある。とくに 2024 年 10 月 20 日には全クラスターのメンバーが参加する年次集会に併せて、「異分野融合型若手育成セミナー」を開催し、大村氏の発表に対して、文化人類学はもちろん、心理学や認知科学、哲学など異分野の研究者によるコメントと質疑応答を実施する試みを行った。言い換えれば同セミナーでは、ただ単に文化人類学系の分担者だけではなく、自然科学系に跨る幅広い領域の分野から、まさに学際的・分野越境的な観点からの議論が行われた。

これに加えてクラスター A では、多くの公開イベントをワークショップ形式で実施しているが、そこには大学院生も含む若手の研究者や学生も多く参加しているため、若手人材の育成にも寄与している。またクラスター B では、教育実践として、分担者の工藤を中心に東京大学において多様性を尊重する身体運動・健康科学実習授業を展開し、学生が身体的協調を通じて多様性と向き合う機会を創出した。これにより、身体性の視座から分断や差別の超克を可能にする人材の育成にも具体的かつ直接的な貢献を果たしている。

【研究成果をどのように公開・普及させ、学術や社会の発展へどのように寄与しているか。】

既に何度か触れた通り、本共同研究では、学術的な論文や雑誌論考等の文字媒体での成果公開や学会・各種研究会等での公開に加えて、参画者ら関係者の協力も得ながら各種の公開型・一般参加型イベント等も積極的に推進しており、狭義の研究者コミュニティだけではなくより幅広いステイクホルダーに向けて成果を発信し、さらに当該のステイクホルダーと協働でのイベント実施にも取り組んでいる点を大きな特徴としている。例えばバリ島の障害者アートの参与観察を含む研究を行うクラスター C の田中とクラスター A の吉田らのメンバーを中心に、パラリンピック開会式でパフォーマンスを演じたことで知られる （自身も四肢障害の当事者でもある）森田かずよ氏（参画者）らを含むアーティストや実務家・実践家とも連携しながら、文化越境的な身体的実践（TBP）を通じた社会的分断の超克と多様性の実現のための方法論構築の

ためのイベント等を 23 年度から現在まで複数回、実施している。

一例を挙げれば 24 年 8 月にはインドネシアのバリにおいて、現地の障害者 NPO（NGO）及びインドネシア国立研究革新庁（BRIN）とも連携して、障害者と健常者の関係をはじめとする「マジョリティ／マイノリティ」関係や身体的・文化的多様性に関する学術会合ならびに芸能実践に関する実践ワークショップを各クラスターの分担者や参画者、そして現地のアーティストやインドネシア人研究者を交えて実施した。さらに「自文化／異文化」、あるいは「日本人／外国人」といった境界や分断を乗り越えていく試みの一つとして、分担者の吉田は一般市民を対象とした異文化体験の演劇的ワークショップ（「バリ島の仮面で変身しよう！」）を企画・実施した。これは、単なる座学による情報伝達というレベルを超えて、参加者自身が実際に体を動かしてみることを通じて文化的他者を理解する演劇的・実験的な試みである。

同じくクラスターA 分担者の村津らは、プロの俳優と共に「他者になる」という身体経験を探究したイベントや、身体を巻き込むマルチモーダル人類学の手法について議論するシンポジウムの開催などを行った。また東アジア圏における分断と超克の実践については、2024 年 2 月には台湾 NCKU 所属の Chun-Chia Kung 教授を招聘し、分担者の高橋を中心とする共同フィールドワーク及び国際シンポジウム「Workshop on Cross-Cultural and Individual Perspectives in Face and Body Perception」を開催した。更に 2025 年 1 月に開催された The 1st Transnational Meeting on Innovative Human Sciences においても、成均館大学の Hoon-Seok Choi 教授及び台湾 NCKU の Chun-Chia Kung 教授らを招致し、シンポジウム「Diverse and Multifaceted Human Science through Experimental Psychology」を企画した。これにより、日本・台湾・韓国における身体の高多様性に関する研究基盤の構築及び国際的な研究交流の促進にも寄与することができた。

またクラスターBの山口は、クラスターCの河野らと共に日本科学未来館において身体的多様性の受容をテーマとする、子どもを対象とした哲学対話を実施した。さらに分担者の工藤は、スポーツや音楽における身体的同期・協調行動の社会的機能に着目し実際に身体を動かすボディ・ワークを含む参加型イベントの実施やその方法論の構築の作業に取り組んでいる。

またクラスターCでは先述のように「哲学対話」の実践を各地で積極的に実践した。このうち 2024 年度には、沖縄県各地、宮城県気仙沼市、新潟県南魚沼市において哲学対話を実施し、間身体的な対面での対話を通して、地域におけるさまざまな分断（世代年齢、国籍、性別、地域への居住歴）を克服し、地域の再構築（創生）をするための文化的・社会的素地の形成を試みた。例えば沖縄県各地での哲学対話（2024 年 9 月 15～18 日）は、地域の文化的多様性やアイデンティティへの気づきをもたらす趣旨で実施された。この活動をきっかけとして学校・行政・報道の関係者で作られる「チーム哲学オキナワ」が発足するなど具体的な波及効果を得た。

さらにクラスターC では、分担者の田中は上述の参画者の森田かずよ氏や伊藤亜紗氏らとともに関係団体や地方自治体等とも連携しながら、障害をめぐる研究と成果発信・普及活動等を積極的に展開中である。例えば 23 年 12 月には一般社団法人 HAPS「公立美術館における障害者等による文化芸術活動を促進させるためのコア人材形成を軸とした基盤づくり事業」の話題提供者として、研究成果や活動の一部を、「合理的配慮に関わる制度や配慮のプロセスについて」という題目で発表した（於下京都市いきいき市民活動センター）。また、神奈川県障害者芸術文化活動支援センター（認定 NPO 法人 ST スポット横浜）による、障害者の芸術文化活動を支援するコーディネーター育成に関する取り組みとして、「一人ひとりから障害を考える」（2023 年 12

月 11 日～12 月 25 日公開)、「障害のある人とともにいること」(2024 年 12 月 2 日～12 月 16 日公開)をテーマとして、オンラインによる動画配信を実施し田中がその講師・コーディネーターを務めた。

【成果の発表状況:主な実施イベント等(論文・学会報告等は E-Rad に入力済のため省略)】

- ① 【一般向けアウトリーチ活動】講演会「ルワンダの戦前と戦後一国の変化を共に見る」 <https://osde.jp/output/result06.html>
2024/7/13 (土) 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ② 【一般向けアウトリーチ活動】「たんけんしよう! あなたの知らない“かお”の世界」 <https://osde.jp/output/result07.html>
2024/8/4 (日) 於日本科学未来館
- ③ 【主催シンポジウム】「社会・文化的多様性の中で他者と共に生きる技法に関する学術集会」 <https://osde.jp/output/result09.html>
2024/8/26 (月) -27 (火) 於インドネシア国立研究革新庁 (BRIN)
- ④ 【一般向けアウトリーチ活動】学術講演会 “Interpersonal Entrainment in Music Performance” <https://osde.jp/output/result12.html>
2024/10/4 (金) 於東京大学
- ⑤ 【主催イベント】24 年度年次集会 <https://osde.jp/output/result11.html>
2024/10/20 (日) 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑥ 【一般向けアウトリーチ活動】体験型ワークショップ「みんなで世界を旅しよう! 2024 地球たんけんたい in Tokyo」 <https://osde.jp/output/result14.html>
2024/10/13 (日) 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑦ 【一般向けアウトリーチ活動】体験型ワークショップ「みんなで世界を旅しよう! 2024 地球たんけんたい in Tokyo × 人類学カフェバリ島の仮面で変身しよう!」
<https://osde.jp/output/result14.html>
2024/12/8 (日) 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑧ 【関連イベント】令和 6 (2024) 年度学術知共創プログラム・研究フォーラム
<https://osde.jp/output/result13.html>
日時: 令和 6 (2024) 年 12 月 13 日 (金) 於オンライン会議 (Zoom ウェビナー)
- ⑨ 【人類学と演劇の動向に関する一般向けアウトリーチ活動】ワークショップ「他者になる」 <https://osde.jp/output/result15.html>
2024/12/22 (日) 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑩ 【一般向けアウトリーチ活動】「ワークショップ ジェンダーとは? からだを動かして、楽しく学ぼう」2025/2/8 (土) 於生活工房ギャラリー
- ⑪ 【主催シンポジウム・一般向けアウトリーチ活動】「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」第二回公開シンポジウム
<https://osde.jp/output/result17.html>
2025/2/21 (金) 於東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究文化研究所

4. 今後の研究の推進方策（4 頁以内）

研究目的を達成するための今後の本研究テーマの推進方策について、令和 7（2025）年度～令和 10（2028）年度の年度別に分けて、具体的かつ明確に 4 頁以内で記述すること。

【2025（令和 7）年度】

2025 年度は、前年度（2024 年度）に引き続き専門分野やクラスター、本計画における役割分担に応じて、各地でのフィールド調査や実験的手法等を含む調査研究、身体性の基盤に関する理論的研究の実施等を主な活動内容としつつ、さらに研究内容の中間取り纏めのための中間総括シンポジウムの実施を検討する。このシンポジウムでは、「身体に関する多様で変容的なパラダイム」のより具体的な枠組みの構築のために、異なる分野とクラスターの協働による研究知見と成果の共有と中間的な総括を実施し、計画後半に向けての課題等をメンバー全員で確認する。シンポジウムは 12 月に実施し、会場は東京外国語大学 AA 研を予定している。学会での成果発表活動とアウトリーチ講演会も前年度に引き続き実施する。

またクラスターや分野ごとにフィールドにおける調査や実験・データ収集と解析なども前年度に引き続き実施していく。例えばクラスター A 分担者の吉田は、「演じる事」「模倣すること」という身体的実践に焦点を当てて、そうした実践が、社会的な分断の超克にどのような可能性を有しているかについて、各地の実践を通じて検討してゆき、とくにバリ島において障害のある芸能家たちの芸能実践や身体的表現に関してクラスター C の田中とも協力しながら調査する。床呂も東南アジア島嶼部におけるマジョリティ／マイノリティの分断と身体表現の関係等に関して、被服文化・ファッション、ポピュラーカルチャーにおける身体表現等に焦点を当てた現地調査を継続し成果を公開していく。高橋はケニア・ナイロビをはじめとする主に非欧米地域の研究者を日本に招へいし、身体性を通じた相互理解および不理解について、文化的多様性の観点から議論を行い、実証研究の構築を進める。

クラスター B では前年度までに実施された多様な身体性に関する心理学的・認知科学的研究を進めるとともに、無意識的認知バイアスならびに対人間の無意図的引き込みに関わる身体性情報の役割についても検討を進める。うち山口は発達心理学的な観点から乳幼児を含めた顔身体認知の発達について研究を実施する。工藤は、スポーツや音楽などの身体パフォーマンスが社会形成に果たす役割について、人文系の研究者と協力し学際的融合研究を推進する。

クラスター C では前年度の成果を踏まえ、引き続き（１）対話の間身体性に関する資料の収集読解と理論化、ならびに（２）「哲学対話」実践による社会的分断の解消のための文化的・社会的素地の形成を実施していく。

研究成果の公開と社会還元等に関しては、バリ島の障害者アートの参与観察を含む研究を行う田中と吉田らクラスター A と C が連携し、さらにパラリンピック開会式でパフォーマンスを演じたことで知られる森田かずよ氏（参画者）らのアーティストや実務家・実践家とも連携しながら、文化越境的な身体的実践（TBP）を通じた社会的分断の超克と多様性の実現のための方法論構築のワークショップを実施していく。

またクラスター B のリーダーの山口は、クラスター C の河野らと協力して実証実験とリンクした哲学対話を行う。サイエンスライター、哲学者、研究者といった多彩なゲストとともに、子どもを対象とした多様性の講演と実験を体験し、参加した子どもと大人がそれぞれ、社会での多様性の扱われ方や受容についての哲学対話を行う。対象は 6 歳～12 歳、あるいは中高生を対象としたイベントも行う。また、伊藤・山本ら複数の参画者の企画による身体をめぐる分断

に関する公開イベント開催を検討する。異分野融合的な若手育成セミナーも本年度以降も継続していく。

【2026（令和8）年度】

2026年度は、前年度に引き続き専門分野やクラスター、本研究におけるそれぞれの役割分担などに応じて、各地でのフィールド調査や実験的手法等を含む調査研究、身体性の基盤に関する理論的研究の実施等を主な活動内容としつつ、また身体的実践を通じて社会的分断を超克し多様性を実現していくための手法構築に関しても、前年度までの実践ワークショップ参加者からのフィードバックや反応を踏まえたブラッシュアップを行う。またクラスターや分野ごとにフィールドにおける調査や実験・データ収集と解析なども引き続き実施していく。

より具体的には、床呂は本年度以降も引き続き東南アジア島嶼部を対象にマジョリティ／マイノリティの分断と身体表現の関係等に関して文化人類学的な調査研究を継続すると同時に、本研究計画全体の統括を継続する。分担者の吉田は引き続き障害のある芸能家たちの芸能実践や動物や草木の模倣表現についての調査を行うとともに、現地で記録した映像資料をもとに、成果公開用の映像作品を作成する。村津はアフリカでのフィード研究に加えて、日本における宗教と障害の関係に関する映像人類学調査を実施し、障害を持つことと福祉、宗教の関係を調べながら、当事者と協働して映像制作を実施することも検討する。高橋は前年度に準備したフィールド実験を実施し、データを収集するとともに、東アフリカ都市部における恒常的な実証研究環境の構築を進める。

クラスターBでは前年度の成果を踏まえて、心理学をはじめとする諸分野（身体運動科学・認知神経科学・人文社会系）を統合した分野融合的なモデル構築を進める。うち山口は引き続き発達心理学的観点も踏まえ、身体認知やマスク着用の影響に関する研究を行う。工藤は身体的協調行動と共感形成の因果的關係に関するデータを収集・分析し、ICT技術を活用した相互作用が対人認知ならびに行動に及ぼす影響を明らかにする。渡邊は先述（pp. 5-6）の映画（ロボットをめぐる実験的映像作品）に関して研究プロジェクト内で公開し議論を深めるとともに、一般公開も試みることで、社会での実践を通じた理論構築の基礎づくりを始める。今回作成した動画や会話の分析や外部発表については、本研究課題の規模を越えるために、他研究にも展開することで実施する。

アウトリーチ的活動や国際連携的な学術交流も積極的に実施していく。例えば東アフリカおよび東アジア地域において、身体性の多様性を通じた分断とその超克に関するワークショップを現地研究者と共に開催する。これにより、実証研究の方向性を評価しつつ、社会還元を見据えた国際的な交流を推進する。

また吉田は仮面を用いた上述のワークショップを改善しつつ、日本文化人類学会の企画において開催し、さらに国際伝統音楽・舞踊評議会（ICTMD）の東南アジア芸能部会（PASEA）において、バリ舞踊にみられる動物の表現についての調査研究の報告を行う。

山口は、劇的に発達する赤ちゃんの成長に沿った環境の設定の重要性を、実際に体験し実感してもらうアウトリーチ的イベントを行う。月齢ごとに劇的に変化する赤ちゃんの脳と行動の成長の様子を紹介し、これまで開発してきた赤ちゃん向けの玩具（園の遊具）や絵本の開発過程を説明する。さらに実際に赤ちゃんとお母さんが一緒に玩具や絵本を体験することにより、月齢に適切にあわせた玩具や絵本が赤ちゃんの興味を引くことを実感してもらい、絵本や玩具の使い方の説明し、一緒に体験してもらう。対象は2歳以下の乳幼児である。

クラスターCは引き続き哲学対話等の活動を実施し、この関連の成果公開として、26年度中にアンソロジー「地域創生のための哲学対話(仮題)」を企画し、出版する予定である。さらに、関連の哲学系・教育学系・心理学系の学会において個人発表やシンポジウム、ワークショップを実施していく。

【2027(令和9)年度】

2027年度は、前年度までのワークショップと調査を継続しながら、最終年度である次年度(2028年度)への前段階の準備作業としての、成果の取りまとめに向けた共同研究を実施する。具体的には年度の前半の段階で原則として参加メンバー全員に本研究の英文成果論集の出版に向けた一次ドラフトを提出してもらう。また各国におけるフィールドワーク等を含む調査研究を引き続き実施し、必要に応じて複数の研究分担者・参画者の共同や連携による調査も実施することとする。また学会での成果発表とアウトリーチ的講演会等も実施する。

またクラスターや分野ごとにフィールドにおける調査や実験・データ収集と解析なども引き続き実施していく。このうちクラスターAの吉田は、バリ島において障害のある芸人たちの芸人実践を調査し、バリ芸人における障害の表現について、社会的受容とその現代的な変化についての考察を論文にまとめる。床呂も引き続き東南アジアにおける被服文化やポピュラー文化における身体表現等と社会的分断などの関係に関して検討を行う。高橋は、フィールド実験を継続しながら、東アフリカ都市部における本格的な実証実験に着手する。また引き続き、東アフリカおよび東アジアの両地域でワークショップを開催し、脱欧米的視点に立脚した研究と社会の架橋を試みる。村津は前年度に引き続きアフリカと日本における宗教と障害の関係に関する映像人類学調査を実施する。

クラスターBも引き続き心理学・認知科学・運動科学等の観点からの研究を継続する。このうち渡邊は、先述の映画の作成過程も含めた議論を、クラスターBの心理学等の人文系の専門家に加え、更に運動科学や認知科学等の自然科学系にも跨る分野の研究者とも連携して行い、社会的分断とそのミクロな身体的基盤に関して学際的な理論構築を行っていく。また、可能であれば、2つ目の映画撮影を開始する。

アウトリーチ的活動を兼ねた「実践ワークショップ」の枠においては、クラスターAを中心に仮面芸人や演劇的手法を通じたマイノリティなど「他者」の身体性の共感的理解を獲得していく方法などに加えて、VR技術に詳しい鳴海拓志(研究参画者)らとも連携して、身体パフォーマンス、映像メディア等をも活用した身体実践に関する参加型ワークショップなどを実施することを検討する。

また、上記ワークショップの参加者の反応やフィードバックの分析などを基に、同ワークショップの方法論をブラッシュアップする。その成果はさらなる国内外でのワークショップの実施へと反映し洗練を図っていく。こうした作業の過程では自身も障害者である「当事者研究」の立場から本研究に参加する広瀬浩二郎や、東京パラリンピックで「義足のダンサー」としてパフォーマンスを演じた森田かずよ氏らの参加と協力を通じて、より良い方法論を＜共創＞していく。

これに加えてクラスターBも他者理解・分断緩和を目的とした共感促進ワークショップを実施し、クラスターCとの連携により市民・教育・福祉現場への応用可能性を探る。併せて、構築されたモデルや実践手法の妥当性を多様な文脈で検証し、方法論のブラッシュアップを行う。

さらに山口は心理学的知見に基づいた赤ちゃんの玩具や絵本や環境を提供し、保護者にもそ

の楽しみ方を提供することにより、保護者と子どもとのふれあい方や子どもの環境理解の機会を提供する。こうした科学コミュニケーション活動とともに、家族を巻き込み、子どものみならず保護者向けに多様な存在への気づきの場を提供する。

さらにクラスターC は対話実践を通じた成果公開と共創を引き続き実施する。例えば沖縄県では先述 (p. 8) のように、さまざまな沖縄の課題について対話するための「チーム哲学オキナワ」が地域の人々によって発足した。これをモデルとして、新潟、宮城など他の地域においても地域内での多様な人々が、共通体験と対話を通してつながりを形成できる「場」の構築に参与していく。

【2028 (令和 10) 年度】

本研究の最終年度となる 2028 年度は、最終的な研究成果の公開を主な目標として、本研究の英文による成果論集の取りまとめのワークショップと同論集の編集作業、ならびに成果公開のための最終的な国際シンポジウムを開催することを予定している。また必要に応じてフィールドにおける補足調査や実験・データ収集と解析なども各分野に応じて適宜、実施していく。クラスターA は、これまでに世界各地で収集したデータを総括し、現地における多様な身体的実践およびミクロレベルの顔身体認知について、普遍性と多様性の両側面から考察する。これにより、本課題が目指す目的の実現に寄与することを目指す。

クラスターB は 2027 年度までの議論と実践を統合し、分析の成果を本研究課題全体の中で共有する。山口は蓄積してきた「赤ちゃんを科学する」知見により、科学的な知見に基づいた子育て環境を提案し、未来に生きる赤ちゃんの環境設計を推進する。渡邊は「ヒト・ロボット」「ジェンダー」「身体の獲得」「国籍」「移動」など、社会的分断とその超克にむけた重要な切り口に対し、映画の作成といった実践を通じて理解・分析の成果を本研究課題全体の中で共有する。

クラスターC は他のクラスターとも連携して成果公開に向けた国際シンポジウムを含む複数の活動を企画・実施する。この過程では参画者の関本幸教授や同じく参画者の Burhani 教授をはじめとする欧米やインドネシアの研究機関の研究者、AA 研の海外拠点である KKLO を通じて東南アジアなどからも研究者や関係者を招聘して、グローバルな視点から研究成果の検討と発信を行い、出版を予定している英文論集の取り纏めへと繋げていくことを検討する。

この過程ではクラスターA から C の全ての分担者ならびに参画者が連携して、身体運動科学・認知科学的な知見と文化人類学・哲学的な枠組みの接点を整理し、学際的に構築された身体性パラダイムと実践手法を総括して国際誌論文を出版する。また、海外研究組織との共同で国際シンポジウムを開催し、研究成果のグローバル発信と社会連携ネットワークの持続的構築を図る。更に上記成果論集の取り纏めワークショップには海外の出版社の英文エディターなども招聘して具体的な編集作業を行う。上記の成果公開の国際シンポジウムは、ゲスト報告者などを含めて前年度までよりも規模を拡大する形で、東京外国語大学 AA 研で開催する予定である。

5-1. 研究プロジェクトチームの体制（必要頁）

本報告書提出時点の研究プロジェクトチームの体制について記述すること。

研究グループ名：クラスターA「多様で変容的な身体性に関する実証研究」

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
研究代表者	床呂郁哉	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	研究代表者・「多様で変容的な身体性に関する実証研究」クラスター研究総括
研究分担者	吉田ゆか子	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授	障害をめぐる芸能やパフォーマンスに関する実地研究
研究分担者	高橋康介	立命館大学・総合心理学部・教授	各地の多様な身体的実践に関するフィールド実験に基づく研究
研究分担者	村津蘭	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・助教	障害者と「健常者」の共存など分断超克の実践に関する映像人類学的研究

研究グループ名：クラスターB「身体性の基盤と社会的分断に関する学際的理論構築」

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
研究分担者	山口真美	中央大学・文学部・教授	「身体性の基盤と社会的分断に関する学際的理論構築」クラスター研究統括
研究分担者	工藤和俊	東京大学・大学院総合文化研究科・教授	身体的実践に関する運動科学と関連分野の協働研究
研究分担者	渡邊克巳	早稲田大学・理工学術院・教授	分断の身体的基盤に関する潜在的過程を含む認知科学的解明

研究グループ名：クラスターC「身体的実践を通じた分断超克の手法構築」

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
研究分担者	河野哲也	立教大学・文学部・教授	「身体的実践を通じた分断超克の手法構築」クラスター研究統括

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
研究分担者	田中みわ子	東日本国際大学・健康福祉学部・教授	芸術実践を通じた社会的分断の超克の方法論に関する研究
研究分担者	小手川正二郎	國學院大学文学部哲学科・教授	「哲学カフェ」等を含む社会的分断超克のための方法論の検討と実践

研究参画者（各クラスターを横断して研究に参画）

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
研究参画者	伊藤亜紗	東京工業大学科学技術創成研究院・未来の人類研究センター・センター長／リベラル アーツ研究教育院・教授	異分野の研究者との協働を通じて、社会的分断の超克に向けた理論的かつ実践的視座を問題提起していく役割を担う。
研究参画者	ナジブ・ブルハニ	インドネシア国立研究革新庁、人文・社会科学研究所・ 所長	東南アジアにおける政治・宗教的分断と超克に関する政治学（ないし社会学）的な研究を実施するほか、本研究の国際シンポジウムの運営面でもカウンターパートとしての役割を担う。
研究参画者	ケイトリン・コーカー	北海道大学大学院・文学研究院・准教授	暗黒舞踊やポールダンスなどの身体的実践に関する参与観察に基づく研究を実施するほか、本研究の他のメンバーとも協力しながら、身体実践を通じたアウトリーチ的活動にも貢献する。
研究参画者	広瀬浩二郎	国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・教授	自分自身が視覚障害者である立場から、障害者／「健常者」の境界の分断と、いわゆる「バリアフリー」を含むその超克の方策に関して「当事者研究」的な枠組みから検討し、本研究の異分野の研究者との共同研究を行う。

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
研究参画者	関本幸	ミネソタ州立大学・コミュニケーション学 部・教授	人種差別と身体性の問題に関して、哲学（現象学）の立場から本研究に寄与するほか、BLM（ブラック・ライブズ・マター）運動関係者等のステイクホルダーないし実務家らとも連携して国際シンポジウム等の企画にも寄与していく。
研究参画者	西井凉子	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化 研究所・名誉教授/AA 研フェロー	主にタイにおけるムスリムと仏教徒の民族間境界や分断を超える各種の身体的・宗教的実践（死者の遺体をどう扱うのか、を含む）に関して民族誌的手法を含む研究を実施し、その知見を他のメンバーと共有していく。
研究参画者	鳴海拓志	東京大学大学院情報理工学系研究科・准教授	ヴァーチャル・リアリティ（VR：仮想現実）に関する工学的研究の知見を活かして、マイノリティを含む他者の身体経験を疑似的に経験するような手法を通じて、本研究が掲げる「分断を乗り越える越境的身体実践の手法構築」に関して工学面からの貢献を行う。
研究参画者	山本芳美	都留文科大学文学部比較文化学科・教授	イレズミを中心にした身体加工の問題に関して比較研究を実施し、いわゆる「温泉タトゥーお断り問題」など身体をめぐる社会的摩擦や軋轢に関しての検証、摩擦を乗り越える学術的かつ実践的な視点や方策の構築に寄与する。
研究参画者	丹羽朋子	国際ファッション専門職大学・国際ファッション学部・講師	NPO 法人での学問知を社会にひらく活動や博物館等での市民参加によるアート・ワークショップの企画・運営等の経験を踏

研究代表者等の別	氏名	所属研究機関・部局・職	役割分担
			まえ、社会的分断を身体性に注目しながら乗り越えていく方法論を、アーティストや実務家を含む多様なステイクホルダーとの＜共創＞を通じて構築し、その成果を社会に発信していく役割を担う。
研究参画者	森田かずよ	NPO 法人「ピースポット・ワンフォー」・理 事長	自ら「義足のダンサー」として障害者パフォーミングアーツの実践や NPO 法人の代表として障害者支援・教育活動等に関わってきた経験を活かして、身体的実践を通じて社会的分断を乗り越える視点や手法構築に、当事者の立場から＜共創＞し社会へ発信していく。

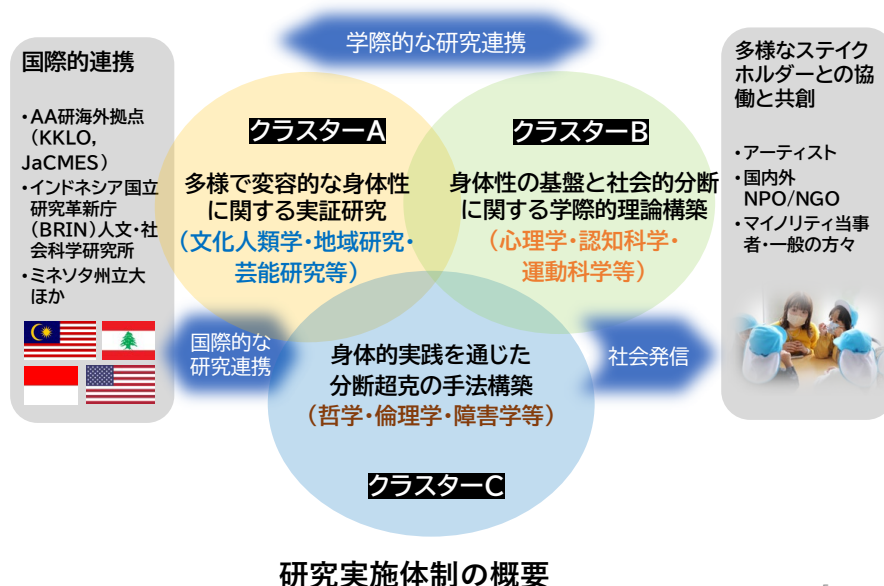
5-2. 研究プロジェクトチームの役割と連携（1頁以内）

研究プロジェクトチームにおける個々の研究者や各研究グループ（研究グループを設定している場合）の役割や連携について、図表などを用いて具体的かつ明確に1頁以内で記述すること。

本研究では、大まかな研究のサブテーマと手法等の特色に応じて、研究分担者は以下の三つの研究クラスターのいずれかに所属するような構成を取る。すなわち「多様で変容的な身体性に関する実証研究」（クラスターA）、「身体性の基盤と社会的分断に関する学際的理論構築」（クラスターB）、「身体的実践を通じた分断超克の手法構築」（クラスターC）の3つである。このうちクラスターAは人類学や地域研究、フィールド実験心理学の研究者らを中心に、世界各地の多様な社会・文化的な文脈や状況に即した身体的実践の多様性に焦点を当てて、その実態を具体的・実証的に解明し、身体に関する多様で生成的なパラダイムの構築に向けた基礎作業を実施する。クラスターBでは心理学等の人文系の専門家に加え、更に運動科学や認知科学等の自然科学系にも跨る分野の研究者とも連携して、社会的分断とそのミクロな身体性の基盤に関して学際的な理論構築を行っていく。

クラスターAとBは、互いに研究成果をフィードバックしながら、さらにAA研海外拠点や海外の大学等に属する参画者の所属先機関とも連携しながら、先述の身体に関する多様で生成的なパラダイムの構築を実証面と理論面の両輪から相補的に展開していく。またクラスターCでは、上記の作業を通じて構築される「身体に関する多様で生成的なパラダイム」の知見を踏まえて、アーティストや実務家等のステイクホルダーとも連携しながら、文化越境的な身体実践（TBP）ワークショップ等のアウトリーチ的活動を通じて、社会的分断を超克していくための方法論の共創とその公開・発信を積極的に行っていく。ただし以上の各クラスターの活動や役割分担は、必ずしも相互に排他的なものとはせず、メンバーは必要に応じて適宜、クラスターの境界を越えて有機的に連携しながら活動を実施していくこととする。また研究参画者に関しては特定のクラスターには帰属せず、必要に応じて適宜、各クラスターに属する分担者らと連携しながら、より柔軟な形で本研究に寄与していく。

また研究の進捗に応じて、それぞれのクラスターの成果は、シンポジウムやワークショップ等のイベントやウェブサイト・ニュースレター等を通じて、基本的に全メンバーで共有し、互いに絶えずフィードバックを行いながら研究を進展させていくものとする。



6. 研究費の使用状況（1 頁以内）

委託費年次支出報告書等に沿って、各年度の研究費（直接経費）及びその費目ごとの主な使途と額について、具体的かつ明確に 1 頁以内で記述すること。

(円)

	令和 5 年度（2023 年度）	令和 6 年度（2024 年度）
研究費	10,000,000	14,500,000
前年度からの繰越		732,803
実支出額	9,030,133	15,232,803
翌年度への繰越	732,803	0
未使用額	308,184	0
主な使途と額 (1) 物品費	・ パソコン 1 台 410,553 円 ・ パソコン 1 台 304,145 円 ・ アクションカメラ 1 台 85,600 円	・ SONY カメラ用ストロボ 53,700 円 ・ 外付け SSD、他 24,180 円
(2) 人件費・謝金	・ 非常勤職員人件費 2024 年 1 月 -3 月支払給与 798,453 円 ・ パートタイム職員人件費及び交通費 1 名分 72,014 円	・ 非常勤職員人件費 2024 年 4 月 -2025 年 3 月支払給与 3,932,484 円 ・ 「ルワンダの戦前と戦後一国の変化を共に見る」謝金 44,548 円 (22,274 円×2 名)
(3) 旅費	・ 身体性に関する差別・分断と多様性に関する野外調査旅費（マレーシア）290,740 円 ・ 身体性に関する差別・分断と多様性に関するシンポジウム等出張費（国内）48,890 円。	・ 社会・文化的多様性の中で他者と共に生きる技法に関する学術集会に関する旅費 1,341,221 円（国内外 6 名分 303,020 円 306,230 円 298,410 円 107,790 円 92,418 円 233,353 円） ・ 身体性に関する差別・分断と多様性に関するシンポジウム等出張費（国内）30,130 円
(4) その他	・ HP 作成(デザインテンプレート/レスポンス)経費一式 435,600 円	・ HP 修正作業 102,850 円 ・ HP コンテンツ掲載（英語版）36,300 円 ・ ホームページ用バナー作成・設置 24,200 円 ・ HP 英文校正 6,210 円

(研究費を特に効果的に使用した例がある場合、その内容)

該当なし

研究成果報告

年度	2023 年度
配分機関名	独立行政法人日本学術振興会
制度名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
事業名	学術知共創プログラム
公募名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
課題ID	23812031
課題名	身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現

【研究論文】

種別	研究論文(研究会, シンポジウム資料等)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	趣旨説明：トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築				
著者名	床呂郁哉				
雑誌名	トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（第六回）				
巻		掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	5
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(研究会, シンポジウム資料等)	発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	趣旨説明: トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築				
著者名	床呂郁哉				
雑誌名	トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (第七回)				
巻		掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	4
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	Emotional response in infants' pupil contagion.				
著者名	Tsuji, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K.				
雑誌名	Journal of Experimental Child Psychology				
巻	238	掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著	○	オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	Metacontrast masking is ineffective in the first 6 months of life.				
著者名	Nakashima, Y., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K.				
雑誌名	Cognition				
巻	242	掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	有
論文課題	Generalized Anxiety Disorder and Depression Associated with Developmental Prosopagnosia: A Case Report.				
著者名	Imatani, K., Inoue, T., Oto, Y., Kitajima, T., Otani, R., F Nakashima, S., Kanazawa, S., Yamaguchi, M. K., Sakuta, R., & Matsubara, T.				
雑誌名	Journal of Mental Health & Clinical Psychology				
巻	7	掲載ページ (開始)	50	掲載ページ (終了)	54
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2023 年	査読有無	有
論文課題	Infants' visual perception without feature-binding.				
著者名	Tsurumi, S., Kanazawa, S., & Yamaguchi, M. K				
雑誌名	Proceedings of the Royal Society B				
巻	290	掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学，研究機関紀要)	発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	哲学対話の意義：暴力の回避と沈黙				
著者名	河野哲也				
雑誌名	福音宣教				
巻		掲載ページ (開始)	26	掲載ページ (終了)	32
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学，研究機関紀要)		発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	道徳科授業における対話的方法の道徳的效果について					
著者名	金澤正治・河野哲也					
雑誌名	立教大学教育学科研究年報					
巻	66	掲載ページ (開始)	101	掲載ページ (終了)	139	
掲載論文DOI						
その他識別番号						
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○	
備考						

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	Playing about with Our Imperfect Bodies: Representations of Physical ‘Disability’ in Balinese Mask Drama Topeng				
著者名	Yukako Yoshida				
雑誌名	Anthropology through the Experience of the Physical Body, Springer Singapore				
巻		掲載ページ (開始)	61	掲載ページ (終了)	75
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(大学，研究機関紀要)	発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	バリ島のランダは魔女で女神				
著者名	吉田ゆか子				
雑誌名	月刊みんぱく				
巻		掲載ページ (開始)	10	掲載ページ (終了)	11
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(その他学術会議資料等)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	東マレーシア・サバ州からフィリピンとの関係を考える①				
著者名	床呂郁哉				
雑誌名	まにら新聞				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(その他学術会議資料等)	発行年	2023 年	査読有無	無
論文課題	東マレーシア・サバ州からフィリピンとの関係を考える②				
著者名	床呂郁哉				
雑誌名	まにら新聞				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	○
備考					

【WEB】

種別	WEB	—	—
タイトル	学術知共創プログラム（2023-2028年度）「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」ホームページ		
URL	https://osde.jp/index.html		
備考			

【その他の業績】

その他の業績 (自由記述欄)

・著作物等 (計5件)

- ① 小手川正二郎、酒井麻依子、野々 村伊純訳、ヘレン・ンゴ『人種差別の習慣——人種化された身体現象学』青土社、2023年、352頁。
- ② 床呂郁哉編 (2023) 『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (第六回)』 (シンポジウム・プロシーディングス)、東京外国語大学AA研、2023年9月15日、128頁
- ③ 床呂郁哉編 (2024) 『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (第七回)』 (シンポジウム・プロシーディングス)、東京外国語大学AA研、2024年2月9日、106頁
- ④ 奥野 克己、川口 幸大、イリナ・グリゴレ、近藤 宏、平野 智佳子、福井 栄二郎、藤原 潤子、古川 不可知、村津 蘭 (担当:共著、範囲:ベナンの妖術師)『世界ぐるぐる怪異紀行: どうして”わからないもの”はこわいの? (14歳の世渡り術)』河出書房新社、2024年3月20日、192頁
- ⑤ 飯田淳子、島園洋介、川田牧人監訳、津村文彦、野波侑里、堀口佐和子、村津蘭訳 (担当:共訳)『(翻訳)『聖なる自己—カリスマ派の癒しの文化現象学』トーマス・J・チョルダッシュ』水声社、2023年12月22日、457頁

本事業に関連したイベント・口頭報告等の一部 (抄)

- ① 床呂郁哉、「趣旨説明: 身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」日本学術振興会・学術知共創プログラム「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」2023年度スタートアップ研究集会、@東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2023年11月12日
- ② 床呂郁哉、「趣旨説明: 身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」日本学術振興会・学術知共創プログラム、「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」第一回公開シンポジウム講演、@東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2024年2月11日、参加者数43名 (うち研究者38名、一般4名)
- ③ 高橋康介、心理学の視点から顔身体概念を再考する、「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」第一回公開シンポジウム講演、@東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2024年2月11日、参加者数43名 (うち研究者38名、一般4名)
- ④ 吉田ゆか子企画・出演、芸能公演&ミニレクチャー「バリ島の音楽と歌芝居にふれよう」、@東京外国語大学プロメテウス・ホール、2023年12月3日
- ⑤ 吉田ゆか子企画・出演、「人類学カフェ—バリ島のケチャを体験しよう」、@東京外国語大学附属図書館4Fラボ、2023年12月1日
- ⑥ 吉田ゆか子企画・出演、「人類学カフェ—バリ島のケチャと声ガムランを体験しよう」、@東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所306号室、2023年11月25日
- ⑦ 吉田ゆか子、「2023地球たんけんたいトリップ4『バリ島の仮面で变身しよう!』」、@京都大学東南アジア地域研究研究所3F中会議室、2024年2月25日
- ⑧ The Transformation of Possession through the Media: Cases from Pentecostal-Charismatic Christianity in West Africa、Muratsu Ran、Workshop "Affective Technologies of Religious and Spiritual Healing"
- ⑨ アフリカのペンテコステ・カリスマ系教会における妖術と憑依—ベナンの事例から、村津蘭、AA研フォーラム 2023年6月14日 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ⑩ マルチモーダル・エスノグラフィーとWebサイトの可能性、村津蘭、日本文化人類学会 第57回研究大会 2023年6月3日
- ⑪ SNSを通じた呪術・治療の知識流通の変容—ベナンの薬草師・呪術師の実践を事例として、村津蘭、日本アフリカ学会 第60回研究大会、2023年5月14日

研究成果報告

年度	2024 年度
配分機関名	独立行政法人日本学術振興会
制度名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
事業名	学術知共創プログラム
公募名	課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
課題ID	23812031
課題名	身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年	2024 年	査読有無	
論文課題	「動物を踊る・動物で躍るーバリ舞踊の表現をめぐって」				
著者名	吉田ゆか子,山口未花子,石倉敏明,盛口満(編)				
雑誌名	『〈動物をえがく〉人類学——人はなぜ動物にひかれるのか』岩波書店				
巻		掲載ページ (開始)	60	掲載ページ (終了)	62
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年	2025 年	査読有無	
論文課題	弔いの知覚論				
著者名	高橋康介				
雑誌名	RITA MAGAZINE2 死者とテクノロジー ミシマ社				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	The other-race effect of pupil contagion in infancy.				
著者名	Yuki Tsuji, So Kanazawa, Masami K Yamaguchi				
雑誌名	Scientific reports				
巻	14	掲載ページ (開始)	9418	掲載ページ (終了)	9418
掲載論文DOI	10.1038/s41598-024-59937-0				
その他識別番号	08:38658628				
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)			発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	Attentional blink in infants under 7 months						
著者名	Suetping Lee, Shuma Tsurumi, So Kanazawa, Masami K. Yamaguchi						
雑誌名	Journal of Experimental Child Psychology						
巻	242	掲載ページ (開始)	105890	掲載ページ (終了)	105890		
掲載論文DOI	10.1016/j.jecp.2024.105890						
その他識別番号							
掲載確定		国際共著		オープン アクセス			
備考							

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2024 年	査読有無	有
論文課題	Direction-selective adaptation from implied motion in infancy.				
著者名	Riku Umekawa, So Kanazawa, Masami K Yamaguchi				
雑誌名	Journal of vision				
巻	24	掲載ページ (開始)	7	掲載ページ (終了)	7
掲載論文DOI	10.1167/jov.24.8.7				
その他識別番号	08:39150740				
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	Could spontaneous interpersonal synchronization enhance athletes' performance? A case report on the Japanese 100-m record race				
著者名	Hiroaki Furukawa, Kohei Miyata, Michael J. Richardson, Manuel Varlet, Kazutoshi Kudo				
雑誌名	Research Square				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI	10.21203/rs.3.rs-4661387/v1				
その他識別番号					
掲載確定		国際共著	○	オープン アクセス	○
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2025 年	査読有無	無
論文課題	地方創生の哲学対話（1）気仙沼での実践				
著者名	得居千照・田口空一郎・石渡美恵子・菊地虹・河野 哲也				
雑誌名	立教大学教育学科研究年報				
巻		掲載ページ (開始)	35	掲載ページ (終了)	50
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)	発行年	2025 年	査読有無	無
論文課題	地方創生の哲学対話（2）沖縄県での実践				
著者名	得居千照・佐藤摩依・奇二正彦・河野哲也・丸野萌子・河原由貴				
雑誌名	立教大学教育学科研究年報				
巻		掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	18
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	研究論文(学術雑誌)		発行年	2024 年	査読有無	
論文課題	日本で人種的マジョリティであること——「日本人性」の批判的現象学の試み					
著者名	小手川正二郎					
雑誌名	現代思想					
巻	52-13	掲載ページ (開始)	98	掲載ページ (終了)	107	
掲載論文DOI						
その他識別番号						
掲載確定		国際共著		オープン アクセス		
備考						

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	ntroduction-Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia				
著者名	Ikuya TOKORO & Hisao TOMIZAWA				
雑誌名	Ikuya TOKORO & Hisao TOMIZAWA(ed.) Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia				
巻	4	掲載ページ (開始)	1	掲載ページ (終了)	14
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年	2025 年	査読有無	有
論文課題	身体装飾からヒトの社会性の進化を考える——「拡張された社会性」へ向かって				
著者名	床呂郁哉				
雑誌名	社会性の起原と進化 始論				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年	2024 年	査読有無	無
論文課題	Introduction-Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia				
著者名	Ikuya TOKORO, Hisao TOMIZAWA				
雑誌名	Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (Vol.4)				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年	2024 年	査読有無	
論文課題	カワイイ文化・オタク文化とその越境ーハローキティから『腐女子』まで				
著者名	床呂郁哉				
雑誌名	季刊民族学190：特集・私たちが歩んだ半世紀（国立民族学博物館創設50周年記念）				
巻		掲載ページ (開始)	50	掲載ページ (終了)	57
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【研究論文】

種別	論文集(書籍)内論文	発行年		査読有無	有
論文課題	社会性の起原と進化 始論 種と性を越えた比較研究のために				
著者名	河合 香史 編				
雑誌名	社会性の起原と進化 始論 種と性を越えた比較研究のために 都大学学術出版会				
巻		掲載ページ (開始)		掲載ページ (終了)	
掲載論文DOI					
その他識別番号					
掲載確定		国際共著		オープン アクセス	
備考					

【WEB】

種別	WEB	—	—
タイトル	「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」の公式Webサイト		
URL	https://osde.jp/index.html		
備考			

【研究データ】

種別					
	公開	共有	非共有・非公開	期限付き公開予定	総数
管理対象データ	0件	0件	10件	0件	10件

【その他の業績】

その他の業績
(自由記述欄)

・本事業に関連したイベント・口頭報告等の一部（抄）

- ① K. Takahashi, Psychological Science beyond Western Cultures, at The Catholic University of Eastern Africa and Mount Kenya University, Kenya, 2025/3/6-7.
- ② K. Takahashi. Psychological Science Beyond Western Cultures: Lessons from Studies on Face and Body Perception in Africa and Japan. 8th International Council for Health, Physical Education, Recreation, Sports and Dance Africa Regional Congress 2024 (ICHPER.SD), Kenya, 2024/9/11-14
- ③ Ran Muratsu, “Distancing from the Emerged ‘ Thing ’ : Religious Healing and Biomedicine s in Pentecostal-Charismatic Churches in Benin”, International Symposium “Affecting Spiritual Healing, Re-making (Alternative) Worlds”, Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies, B23, 招待無し, 2024/12/8
- ④ Hughes, Y., Mukai, K., Nitta, J., Watanabe, K., & Kudo, K. Emergence of improvisation: An examination through online discrimination experiment using audiovisual conditions. Adaptive behavior and its ecological foundations2025, Kobe University, Japan.,2025/2/15
- ⑤ Onagawa, R., Kudo, K., & Watanabe, K. Subjective processes underlie risk-seeking bias in action timing selection under risk. The Society for the Neural Control of Movement, Dubrovnik (Croatia), 2024/ 4/15-19
- ⑥ 発表代表者：田口空一郎，共同発表者：石渡美恵子，得居千照，河野哲也「多世代地域コミュニティ形成のための哲学対話の実践報告：気仙沼市における3つの事例を通して」日本哲学プラクティス学会第5回大会，於：長野県立大学，2024年9月29日．
- ⑦ Shojiro Kotegawa, Everyday Racism and Human Dignity, International workshop on Human Dignity: From Phenomenological Perspective, Kokugakuin University, Tokyo,2024/3/23.
- ⑧ 床呂郁哉（2024）,「イントロダクション・趣旨説明」JSPS受託研究課題「身体性を通じた社会的分断の超克と多様性の実現」第二回年次集会,於AA研,2024年10月20日
- ⑨ Ikuya TOKORO "Introduction on Arts of Living with Others" Academic Meeting on Arts of Living with Others,BRIN(Bali), 2024/8/26